ガロ

1992 8

1964年11月10日第3種郵便物認可
1966年4月5日国鉄首都特別扱承認雑誌2343号
1992年8月1日発行第29巻第7号通巻331号
（毎月1日発行）

緊急特集 追悼 山田花子

ガロ名作劇場⑦ ガロから巣立った有名作家
矢口高雄・池上遼一インタビュー

対談：大越孝太郎×
和嶋慎治・鈴木研一（人間椅子）

吉田戦車
沼田元氣
みうらじゅん
谷弘兒
唐沢商会
津野裕子
根本敬
ひさうちみちお
松井雪子
菅野修
三橋乙揶

440yen

月刊漫画 ガロ
追悼 山田花子
1992 8
青林堂

月刊漫画ガロ 8月号目次

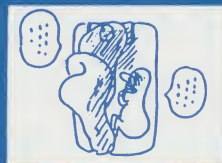
表紙イラスト●山田花子　目次イラスト●知久寿焼
表紙フォト●岩切等　表紙デザイン●原口健一郎

コイソモレ先生

しりあがり寿 著

7月25日発売予定

装幀・スージー甘金

どんなに悲しい時もあのヒトは……

フトンの中に……

丘の上に…………

そしてアナタの隣りに……

電車の中に………

B六変型上製　定価980円(本体価格951円)　青林堂

ガロ No.331 1992 8

1966年4月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第2343号
1964年11月10日第三種郵便物認可
1992年8月1日発行（毎月1回・1日発行）
第29巻第7号 通巻331号
編集人 発行人 山中 潤
〒101 東京都千代田区神田神保町1-62
☎03(3291)9556・2495 FAX03(3292)7368
郵便振替・東京0-135477
株式会社 青林堂

雑誌02511-8　定価440円（本体427円）

嘆きの天使

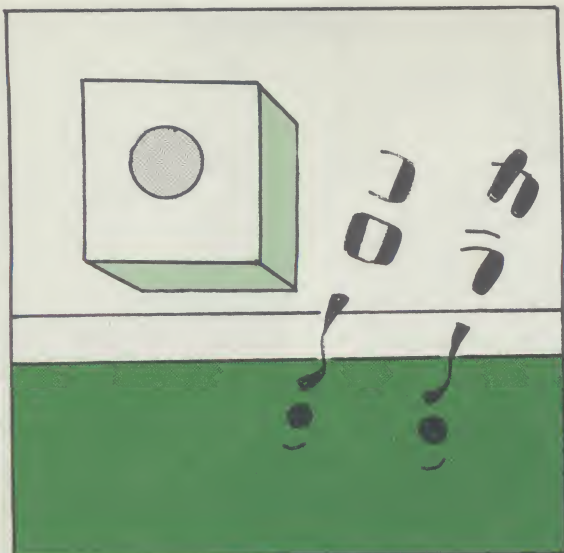
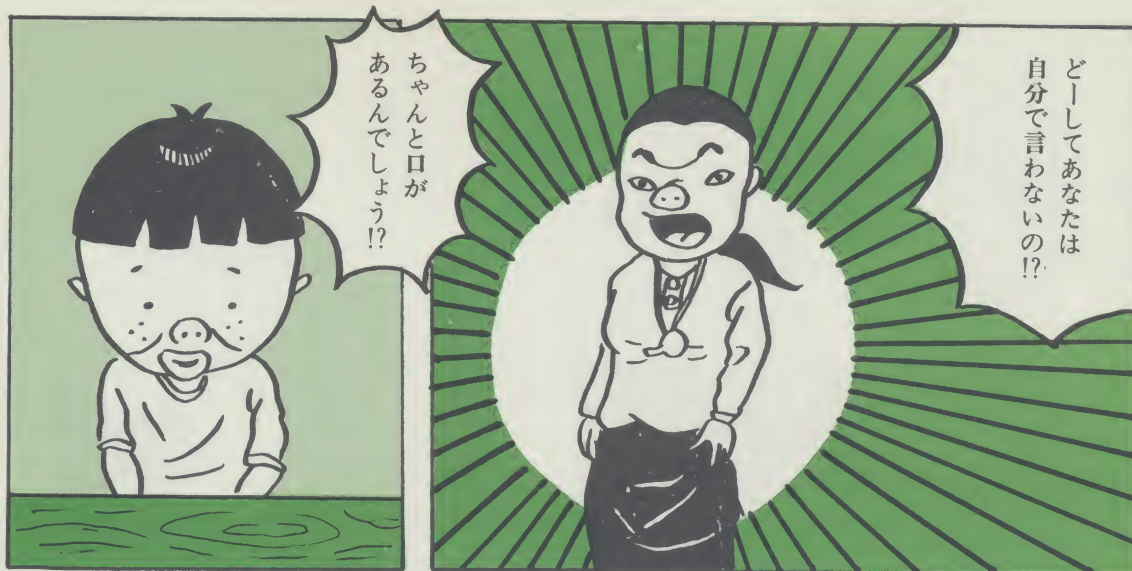
Der Blaue Engel

緊急特集・追悼

山田花子

◆団地11階から飛び降り死ぬ　二十四日夜、日野市百草、住宅・都市整備公団「百草団地」一街区五の三で、女性が二階屋根部分に倒れているのを住民が見つけ、一一〇番通報した。この女性は多摩市内の無職A子さん(三四)で、間もなく死亡した。十一階の通路にいすが置いてあり、このいすを使って手すりを乗り越え飛び降りたらしい。
(日野署調べ)

1992年5月24日——山田花子さんは自ら命を絶った。(享年24歳)

※この作品は山田花子さんの遺作となったものです。

どーしてあなたは自分で言わないの!?
ちゃんと口があるんでしょう!?

ヒック
ヒッ ク‥

ポン

あんまり気にするのよしな

今度から忘れないように気をつければいいんだから、ねっ
ヒック
ヒック
あたしの教科書見せてあげるからサ

4ツ葉のクローバー
（その②）

山田花子

ちょうどその日は
ウィンクの
新アルバム
発売日だった

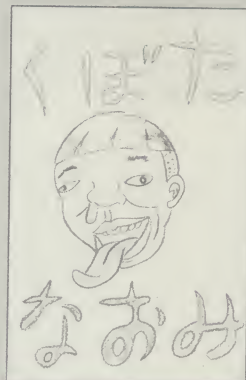
し、CD
聴いてるのっ!

終

同人誌『天国』

（『天国』より）「赤木くんメモ」

ガロに投稿し、ボツになった作品

2歳の頃（69年8月）

創作絵本『くぼたなおみ』

山田花子：年譜

1967年（0歳）
6月10日、御茶ノ水・三楽病院で高市俊晧、裕子の長女として生まれる。大人しく、よく眠る赤ん坊であった。

1970年（3歳）
世田谷区経堂から、多摩市の公団住宅へ転居。車のセールスマン（後に著述業に転身）の父、小学校教師の母、一歳下の妹、祖母、叔母との6人家族。

1971年（4歳）
桜ヶ丘第一保育園入園。昆虫図鑑・と動物図鑑、絵本（佐々木マキ著『やっぱりオオカミ』）を眺めて暮らす。画用紙を束ねホチキスで綴じ、子リスを主人公にした絵本を何作も創る。一人で玩具で遊ぶ時も、物語りを創りながら遊んでいた。

1973年（6歳）～
多摩市立竜ヶ峰小学校入学。水木しげる、赤塚不二夫、楳図かずお、日野日出志、ジョージ秋山等を愛読する漫画好きの子供。友人と合奏や劇の創作、漫画本創り、イタズラ等をして遊ぶ。

1979年（12歳）～
多摩市立和田中学校入学。中2の時、いじめに遭い、自殺未遂。人間不信に陥る。漫画家を目指し、講談社『なかよし』に投稿、入選。短期間『なかよしデラックス』に「裏町かもめ」というペンネームで連載。

1982年（15歳）～
私立立川女子高校入学。ほとんど学校へは行かず、家で寝込む日々が続く。一年で中退。
この頃、ガロを知る。根本敬、蛭子能収、丸尾末広、花輪和一、鈴木翁二、鴨沢祐仁、井口真吾等の作品を愛読。とくに根本敬に強く影響を受ける。
ガロに何度も投稿、落選。漫画家を諦めようかと思っている時、高杉弾の影響で編集を志す。編集デザイ

個人誌『グラジオラス』

（制作メモより）

初めての単行本『神の悪フザケ』（講談社刊）

小説「生きていても大丈夫」（『グラジオラス』より）

生きていても大丈

（作）山田花

誰でも心の底に「ソレを言っちゃ、おし
というものを隠し持っている。例えば、
女にふられたみっともないだけの男が「よ
けなげでかわいそうなピエロだ」と思い込
自分をドラマの主人公に仕立て上げちゃ
のはよくあることだ。誰だって自分が可愛
自分だけはイイ子でいたい。
幸子はみにくい少女であった。中学2年。
顔や形がみにくいっていうんじゃなくっ
でみにくかった。クラスメートとおしゃべ
と、言わなくてもいいこと（例えば、
て、数学のテスト30点だったんだってー？と本
しまう）を言ってしまい「あんた、そんなこと言わな
いいでしょ!」と言われてしまったり、話のタイ
悪くて、人がしゃべってんのと同時にしゃ
また、相手の人の声がやたらとデカかったり
幸子の声はかき消されてしまい、誰にも
もらえない、というのはよくあることだった。
ワガママな女が消しゴムをつかってる時、
と言ったのだが、「今、使ってるからダメ」とも

マンガ制作メモ

ンの専門学校への入学資格を得るため、バイトをしながら通信教育を受け、18歳で大検に合格する。

長谷川集平の絵本学校へ通う。級友と同人誌『天国』を創る。

1985年（18歳）〜

日本デザイン専門学校グラフィックデザイン科に入学。

筋肉少女帯、原マスミ、あがた森魚、戸川純、とうじ魔とうじ、根本敬の名盤解放同盟のライブに通う。

1987年（20歳）〜

妹とバンド『グラジオラス』結成。自作の歌をキーボードを弾きながら唄う。ライブハウスに2回程出演。個人誌『グラジオラス』を創る。

専門学校卒業間際に、講談社『ヤングマガジン』のちばてつや賞に入選。同誌に『神の悪フザケ』を連載。（連載終了後はコラムを連載）

1989年（22歳）〜

『男心』でガロ8月号に登場。（以来92年2・3月号まで、毎月作品を発表）講談社から初の単行本『神の悪フザケ』を上梓。90年に小社から2作目『嘆きの天使』上梓。

石丸元章のラジオ番組に出演、自作の漫画を朗読する。91年劇団『健康』から脚本の依頼。映画『無能の人』出演。TVK『ファンキートマト91』根本敬の『世紀末特殊漫画教室』、日本テレビ『元気が出るTV』に出演。白夜書房のパーティで一人コントを演じる。

91年秋頃、「漫画描く気力がない」と妹に漏らす。

頻繁にメモを付ける、話している途中突然立ち去る等の奇行が目立つ。日記に「友人も恋人も親も兄弟もいらない。自分は天涯孤独でいい」とある。

1992年（24歳）

3月4日、精神分裂症の為入院。軽いので3ヶ月程の入院で治るとの医師の診断。

5月23日退院。実家へ戻るが、「漫画は当分描かない」と仕事の道具をアパートへ置きに行く。

翌24日夕刻、高層団地の11階から投身、死去。（敬称略）

山田花子に捧ぐ

原きみ子 作詞・作曲
佐藤苣弘 編曲

男女物語

原きみ子

一、
あなたを愛す
その人来ない
道をひとつ歩くのよ
うしろ姿のみじめらしさ
そのうしろで
お日さまが笑うだけ

バカな女だ
バカな女だ
だれが悪いのか
いいえぼくたち
いいえぼくたち
悪いのはぼくちゃん
そうよぼくたち
悪いのは世の中
いいえぼくたち
いいえぼくたち
悪いのは世の中
この世の中がうまく
行くことを祈りましょう

二、
その手の中に握手をしよう
何で世間を気にするの
道行く人に
おじぎをして
そのうしろで
あなたが笑うだけ

ウブな男だ
ウブな男だ
だれが悪いのか
そうよ私たち
悪いのは私ちゃん
いいえ私たち
悪いのは天国
そうよ私たち
悪いのは地獄
早く天国と地獄へ
行ってお休みしましょう

原きみ子さん

山田花子さんは生前、この曲を非常に好んでいたが、自ら死を選ぶ運命だったと解った今となっては、この曲こそ山田花子のテーマかも

そうだボデコンを買おう、きっと君に似合うよ
コイツ、ヒトの気もち考えないで、いいかげんにしてよ！
いいえ、私にはあまり似合わわ…
君せっかくボクがプレゼントしようってのにイヤだってゆうのか!!
キイ～～もうガマンできないわよーしこの機会に云ってやるわ
もも、もう…あなたも私、あ、あなたも私、わ、わかか…
怒った？でもいつまでも自分のカラにとじこもるのはネクラだよ君よくないなァ
ネクラ!!
…今時そんなコトバ使わないでよ…あて、戦意喪失
あ、そ、そうかしら……
ヘナヘナ
「ネクラ」という言葉にケッコウ傷ついてもいる
本が落ちてる
東販
イチジラルシイ自己嫌悪に見舞われたさゆりだが翌日、道ばたで、一冊の漫画本と運命的な出会いを得たのだった。
で、結局、正に押し切られ、ボディコンを身にまとい聴ずかしい思いをする、さゆりだった…。
おばちゃ～～ん ボデコン一ケ
おしゃれの店 モダンカンカン
あいよ
ボディコン 特価3千
ディスコ桐島
六本木ビル
ほら～ やっぱり似合うじゃないか～ 君 なァ～
あ…
ヒデ～
立ってる
モダンカンカン
もう嫌！ 正の無神経も嫌だけど、結局何もいえず、されるがままの自分はもっと嫌！ 総てが嫌だ！
↗ケイベンのマナコで見るイケイケのボディコン
タマミは、いつも決まりきったセリフしかしゃべれない。
大変申し分けありません。
どうもありがとうございます。
いえいえとんでもない！
ニッコリ
ペコペコ
相手が期待していそうなリアクションをとる。
ごめんネ～～、残業、交代してもらって。ねえ、怒ってる？
…怒ってないよ。
「友達」がいないと、世間から「人間」らしく思われないのでまったくノリの合わない周囲にムリして溶け込もうとする。
今日から私を女王様とお呼び
キャッ
ギャハ
ユカリンってほんとにヘンな奴～！
（飲み屋にて）

ガーン
こ、これは私の事だわっ
天使
嘆きの天
何の取柄も無く
人に好かれないなら
死んじまえ
悪いことは言わない
生きたところで負け犬
だらだらと
いつまでも生き続けるより
思いきりよく燃え尽きよう
生きるなんてどうせくだらない
（映画）『ファントム・オブ・パラダイス』より
例え正さと別れたところで、何も根本的な解決にはならないわ。そうよ私、死んだ方がいいんだわ
自殺しよう！
……と、決心するさゆりだったが、しかし…
タイヘンよ
正が不慮の事故で急死したのだった。
さゆりちゃんがカワイソー 愛し合ってたのに
悲しい？
え、ええ シクシク
ちぇ、私が死のうと思ってたのに
……
そして2年後
おしゃっと死ねたわ
タイヘン
山田花子（敬称略）から初めて手紙が届いたのは、8年程前になるか。茶封筒にキタナイ字で「根本敬大先生様」と書かれ、中を恐る〜あけるとやっぱりキタナイ字で（しかも鉛筆で）ノートを破ったヤツに、自分がいかにファンであるかが細々と書いてあった。その後、実は漫画を描いていると知り、見せて貰うと、大層見どころがあるので（実は彼女は絵がうまく、器用でどんな絵も描ける）ガロに面白いよと紹介したが、何故かなかなかのせてもらえず、気が付くとヤンマガで山田花子としてデビューしていたのだった。山田花子は神様の目からも、こぼれ、仏も見落とす様な、人間の地味な心理や気分や抑圧や、ほ〜んのちょっとしたエゴをじっくりと見すえ（観察というべきか？）て来たわけだが、それにしても業の深い漫画家だった。でも、彼女の自殺には全く意外性がなかった。たしかに、個人的には高市由美の死は悲しいが、作家、山田花子の自殺には、否定的な気持は沸かない。例えば麻薬をやってヨイ人間（勝新とか）とよくない人間（宮沢首相とかね）がいるように、自殺してヨイ人間とイケナイ人間がいて、山田花子は前者だ。そんな人間にとって自殺して早死にするのもひとつの生き方故に冥福はあえて祈らない。
今度新らしく死んだ仲間だ
よ、よろしく…
天上界
初等死人コース
席は山田のとなりだっ
村田さゆり
ハイ
神様達は気付いてないけど、私はアンタが何でここへ来るのに2年間、間をおいたか知ってるよ
え？！？
でも、今すぐ死ぬと皆に、この人の後を追ったと思われちゃうから、皆が忘れる迄少し待とう
でしょう
よ、よく見てるわね…
こらそこ 何をお喋りしてる。
あ、あ、スイマセ…
何をメモしてるの？
秘密……
観音様
恵比寿
エンマ＝実は気がちいさいマグレ（鬼がクサイ）クマ
大黒天 相手により態度ちがう
プライドなし（金のためなら何でもやる）
※山田花子は生前、身近な人間を評した、こんなメモを作っていたという。

「それでは山田花子さん、さようなら。」

蛭子能収

私はこの世で一番恐ろしいのはしぬことであるから自ら死を選ぶことは絶対にあり得ないと思っていますけど、山田花子さんの実家へ線香をあげに行く時、マデイさんと一緒に高幡不動の駅で根本さんを待っている時にマデイさんが死ぬことよりも生きている方が辛い時もあるんじゃないのといいました。

そんなことあるかな、と私は思いましたけど私は咄嗟に「そうね、行きてる方が辛いってこともあるね」と言ってしまいました。

私はいつもこういう方法で生きているのかも知れません。山田花子さんは、こういう風には生きれなかったんだと思います。純粋な芸術を志している人だったのだと思います。

さようなら、と言うしかありません。そして感動すると言うか、よくやったと言うか、言葉で書くと私の人格を疑われそうですが、芸術を志している人が死を選ぶ時、それは命を賭けた最大の芸術を貫行したということになるのではないかと思うのです。

彼女は最大の芸術を完成させ、死霊になって私達が驚く様子を見て笑っているのではないでしょうか。ウス笑いを浮かべ、私達の家の回りを飛んでいるような気がします。「どう、面白かった?」と問いかけながら。怖いです。私達はもしかすると一生、山田花子さんの霊に監視され続けるのかも知れませんから。

山田花子さんと最後に交わした言葉はこうでした。私が「山田さん最近ガロにマンガ描いてないんじゃないの?」と言うと「ガロ読んでもないくせに、読んでから言って!! それから蛭子さんは、もっと面白いマンガ描いて!!」と言うものでした。実に棘々しく言うので私は恐ろしかったですが、なぜに昔、私のファンだと言ってた年若い女の人に、こんな口調で言われなきゃならんのか?と心の中で呟きました。

だけど彼女の言うことが当たっているから自分で情けなくなっていました。ガロを読んでないと言うことと面白いマンガを描いてないことが当たり。

私は今、山田花子さんの死霊に言いたいですね。面白いマンガを描けなくても、生きてれば面白いことはありますよ、と。生きてる人に向かって反論するのは難しいけど死人に反論するのは楽だなーなんて言ったりして。

山田さんに会った回数は全部で10回位でしたが、顔を会わせると何かイヤなことを言われそうでドキドキしました。そのドキドキするのが非常に良いのです。ドキドキしないと面白くありませんから。

それでは山田花子さん、さようなら。と言っても、この辺りをウロウロ見回しているでしょうけど。

内田春菊
花ちゃんのこと

物静かではあったが、けして暗い人ではなかった。そこらへんの温室育ちで女王体質の漫画家なんかよりよっぽど社交的で礼儀正しく、一人でもいろんなところへ出かけていける人だった。エスケンさんのライブやパーティーで会ったり、また、私のバンドのライブにもよく来てくれた。ヤングマガジン誌の担当氏も彼女が紹介してくれたのだし、
「リイド社は自由に描かせてくれる会社ですよ」
などと、仕事のことについてもいろいろ教わった。

あまり長く話したことはなかったが、たまに冗談とも本気ともつかないようなことを言っていたずらっぽい表情を浮かべているので、
「花ちゃんてばまたそんなこと言って」
と言うと、くすくすと笑う。可愛いだけでなく、色っぽい人だったと思う。

花ちゃんの漫画にも不思議な色気があった。講談社から出た方の本だったと思うが、女の子が男の子に多少強引に押し倒される所があって、乳首を舐められたりするんだったかな、そこを見たときすごくどきどきした。男と女の現実から目をそらさない人だけが引き出せる興奮だった。絵に関してもいつも試行錯誤を繰り返している感じで、たのもしかった。

私はライブ会場などで彼女を引っ張り回し、周りの人に紹介したりした。
「今女性の漫画家の中で一番エキセントリックな山田花子ちゃん」
と言うと、
「そんなあ」
と恥ずかしそうにしていた彼女を私は忘れない。なんだかこんな風に書いていても未だに信じられないんだけど、彼女は自殺してしまった。これも、現実で、そしてちゃんと受けとめなければいけないという意味で、大切なことなのかも知れない。心からご冥福を祈っています。

赤田祐一（飛鳥新社・書籍編集部）
山田花子印象記

彼女はどう思っていたか知らないが、僕は山田花子を年下の友人のように思っていた。彼女と初めて仕事をしたのは1989年の春で、僕がまだ少女雑誌『ポップティーン』の編集部にいたころの話だ。そのころ僕は毎日のように新人で面白そうなマンガ家を探していて、彼女のマンガに出会った。『ヤングマガジン』に掲載されていた「神の悪フザケ」を読んだのだ。そのころはまだ『ガロ』に作品を発表していなかった。まわりからバカにされ、笑われ、それでもしくじってばかりいる悲しい女の子を主人公にした学園マンガだった。暗い哄笑が画面から聞こえてきた。山田花子の絵はヘタクソだった。でも、強烈なインパクトがあったので、僕は一発で気に入ってしまった。

そのとき感心したのは、彼女のマンガが実にオリジナルで、誰の真似でもないところだった。登場人物がみんな昆虫みたいに見えるのだ。山田花子は日本のマンガ家というより、ニューヨークで発行されている前衛マンガ雑誌『RAW』あたりに掲載されている神経症的なコミックの雰囲気に近いものを持っていた。イラストの仕事をお願いしたいと思って会う約束をした。JR東中野駅の線路沿いにある古ぼけた喫茶店を指定された。しばらく待っていると、ベレー帽に丸いサングラスをかけた女の子が小走りに駆けてきて、喫茶店のキイキイ鳴る木の扉を開けた。彼女が山田花子なのだ、とすぐに思った。「遅れてすみません。夕方まで板橋の工場でバイトしているので…」と言ったので、若いのに大変なんだなと思った。

山田花子はどこかフニャフニャした印象のある内気な女の子だった。カフェオレか何かを注文したので、打ち合わせを始めようとしたが、彼女はまだサングラスをはずそうとしなかった。それでなくても、うつむきかげんで向かいあっているから、話がしづらいなと思っていたら「自分は対人恐怖症なんです」と教えてくれた。初めての人に会う時は、必ずサングラスをかけないとダメらしい。僕たちはまるで山田花子のマンガのようだった。なかなか彼女のほうから話しかけてこないので、気まずい沈黙がしばらく続いていた。僕は焦って頭の中で話題を探していたら、「神の悪フザケ」の中に、確か大槻ケンヂにそっくりなキャラクターが出てきたことを思い出したので聞いてみたら、〝ナゴム・レコード〟の大ファンなんですと教えてくれた。初期の〝筋肉少女帯〟や〝人生〟がどんなに素晴しかったか、〝死ね死ね団〟の中卒が1メートル近いモヒカンをしていることなどを、実にうれしそうに話してくれた。そう言えばメジャー・デビュー以前の〝たま〟の存在を教えてくれたのも山田花子だった。

ぼくは「山田さんはナゴムギャルなんですか？」と聞いてみた。ナゴムギャルとは、ラバーソールにニーハイにオダンゴ頭でナゴム系バンドの追っかけをしている女の子の総称だ。「以前はそうだったかもしれないけど、今は違います。最近はナゴムにも無神経なファンが増えてきて、ステージの最前列で騒いだりするナゴギャがとてもイヤです」と否定した。でも僕は、山田花子という人は、ナゴムギャルがそのままマンガ家になった女の子だと思った。〝筋少〟や〝人生〟を聞いて育ってきたひ弱な20代の中から、新しいクリエイターが生まれ始めた点に、僕は興味があった。彼女のマンガがこれからどのように変わっていくのかを見て行きたかったのだが、それは果たせなくなってしまったので残念に思っている。どうして死んでしまったんだろう。最後に山田花子を見かけたのは『無能の人』のスクリーンに登場した姿だった。

マディ上原
僅かな会話と思い込みのこと

山田花子さんとは数回しかお会いする機会がありませんでした。昨年の夏、渋谷のギャラリーで根本さんに紹介してい

ただいたのが初対面なのでした。
それほど時を置かず、同じ場所で2度目にお会いしたとき、何か話題を、と思いたち「籍だけが残っている離婚寸前で別居中の女房が山田さんのファンなんです…」と切り出すと、つぶやくように小声で「嬉しい」と答えてくださったので、「何かの席でご一緒するようなこともあると思いますが、その時は仲良くしてやってください」と、妙な付け足しをしたのでした。
半年を経て今年、吉祥寺のライヴハウスでお会いしたときに、今度は山田さんから話しかけてくださり「どうも根本さんはマディさんのことを気に入っているみたいだから仲良くしてあげてくださいね」などと仰いました。間（あいだ）に半年を挟んで、応答が一つぎごちなく成立したような、変な具合で、お互い少し照れた…ような気がします。
しかし私としては、はなはだ勝手に、会話こそ少なかろうが、我々は同じ陣営の漫画家で志すものは近く、了解し合う処、多である…と思い込んで居りました。
今となれば、それは大きな思い違いで、私は山田さんのことを何も判っていなかったと気付きます。あんなおためごかしの会話でなく、もっと色々と話してみたかったと思います。
そして、少なくとも知るかぎり私の周りの人達は皆彼女を好きだったのに、まるで彼女はそれを知らなかったみたいに思えてしまえることが残念です。才能に満ちた、とても可愛い方でした。御冥福をお祈りします。

花輪和一

山田花子さんの作品は「ガロ」の中でも読みやすくて、内容がわかりやすくて私の好みに合っていたので毎回読ませていただいておりました。いつも作品には自信のないような主人公が登場して、ヘマをする姿が哀愁があっておもしろかった。絵の線がクネクネした感じで、これもストーリーに合っていたのかも知れない。このままいっぱい描けばますますおもしろくなっていったと思いますが、とても残念です。御冥福を心よりお祈り申し上げます。

ジーコ内山（俳優・パンク映画評論家）

山田花子さんとの出会いは、彼女が僕のライブ「エレファン島カシマシ危譚」を観に来てくれた事が始まりでした。電話予約の名簿に山田花子という冗談みたいな名前があり、もしかしたら本名かも知れないし、関西系のお笑いでこんなのいたな…と思ってたら宝島でイラストを発見し、漫画家だと分かりました。皆に聞くと変わった作風との事、コレはスゴイと思い、彼女にライブに来てもらったお礼の電話をかけました。そうしたらライブはとても面白かったと誉めてくれたので、僕も山田さんの絵が好きですと言ったら、何とその後で著作「嘆きの天使」を送ってくれたのです!!感激して、また電話をかけ「裏表紙の写真の花子さん、キレイですね」と言うと「化粧ですよ、化粧」と笑ってた。それから何度も電話をかけるほど仲良くなり、一緒に美術展に行く事になりました。去年7月26日文化村での「マン・レイと友人たち展」です。渋谷ハチ公前の交番で待ち合わせをすると、少女の様な花子さんが無表情で待っていました。歩きながら「友達の漫画家が結婚してからつまらない漫画を書く様になったので、私は結婚はしない」とか、「青林堂に勤める妹と一緒にバンド組んだ事がある」等の話を聞きました。僕が「山田花子って本名ですか?」と聞くと「秘密です」と答えたのが印象的。（亡くなるまで本名は知らなかった!）それが最初で最後のデートです。…その後も根本敬展で会うと、元気にはしゃいでいて、僕の次のライブに本物の乞食を出そうとか、鳥人間コンテストで飛びおりた人の中には何人も死者が出たとか、とても楽しそうにしゃべり、本当に少女の様な人だと感じました。やがて年末に彼女の最初で最後の貴重な舞台を見る事が出来たのは幸運としか言いようがありません!白夜書房関係のパーティで何とそれも一人十役以上、衣装変えも変装も彼女は自分の漫画を舞台化してました!ギャグとギャグの合間、段取りを無視し、客に向かって「後少しだから我慢して下さい」と延々30分以上やるというスゴさ!!僕はそれを見て次のライブには絶対出演して下さいと頼むと、彼女も大乗り気で

とても身近にいた友だちが、この世からいなくなってしまった。
たいへんにくやしいとゆう気持が、
私をつつみました。
3年前の夏、山田花子さんと、青林堂の
高市さん、私と私の家内との四人で
東中野の「まつり」に行った。
東中野に住んでいた山田花子さんが
「まつり」にさそってくれたのだ。
四人で楽しかった。
山田花子さんは、私にやさしくしてくれた。
友だちが、この世の中からいなくなってしまって、
こんなに悲しい。
こんなにくやしい気持につつまれてしまった。

石川次郎

イラスト・ジーコ内山氏

OKしました。まずは3月17日の象さんのポットライブに出演依頼をしたのですが、2月頃からぷっつりと消息が途絶えてしまいました。そしてライブの前日に「今、出られない所にいます…」と電話が、かかって来ました。病院に入院していて6月には出られそうとの事。僕は何としても次回の根本さん原作「こじきびんぼう隊」に出演してもらいたかったので「がんばって下さい」と励ましました。それから2ヶ月ほどして、突然彼女から「具合が良くなりました。この間はすみません。次の舞台で何かセリフのある役を下さい」と電話が来ました。僕は大喜びで彼女の為に役を作りました…が、数日後、彼女の父親から電話で、医者から止められていて、薬を飲むと夜眠ってしまうので出演は無理との事。本人に代わってもらい「すみません…でも絶対に当日芝居を見に行きます」と言葉を戴いたのがまさか最後になるとは…ライブの当日、僕は観客の前で彼女の死を告げました。皆、ショックを受けていました。たぶん、彼女は会場で見ていてくれたと思います。今まで僕が会った人の中で最も純粋な女性でした。純粋すぎたのでしょう…でも僕の前では、とても心を開いてくれ漫画より演劇がやりたいと今後の抱負を語ってくれました。これからも長く友達付き合いを続けていけると思っていたのですが…その代わりに思い出という形と作品が僕の心に残り続ける事でしょう。近い内、必ず彼女の作品を舞台化したいと思います。それが彼女の意志を受け継ぐという最良の形ですから。では、最後に彼女がアンケートに書いてくれた言葉を皆様に送ります。「人生は1回切りなんだから、どんどん、すきなことをやった方がいいですよ。」

大槻ケンヂ(筋肉少女帯)コメント

山田花子さんの漫画の中に、「大槻」や「たまみ」という名前がよく出て来ていたので、とても気になっていました。いつか機会があれば一度お会いしたい、と思っていたのに、それもかなわぬ事となってしまい、残念至極です。

実は、筋少を支持してくれていた、京都の24才のパンクスのファンが、突然亡ってしまった事があったのですが、やはり、自分のやっている音楽を評価してくれた人が不幸にも亡ってしまうと、いたたまれないモノを感じます。

山田花子さんの漫画を読んでいると、自分の高校時代を思い出してしまい、つらい部分もありました。山田さんと同じように、思春期の他人とのコミュニケーションがうまくとれない悩みの追求を自分もやっていましたので……。

マンガと音楽はスタイルこそ違っても、根本的なところでは同じだと思います。このたびの事は残念の一言につきます。

心より御冥福をお祈りいたします。

大槻さん、ロビーでジュース飲もうよ。
最近一緒にお昼ごはんを食べる友達を得たタマミ
うん!(今、おカネないんだけどな。)

安彦さんと二人で

石野卓球さんが貰ったサイン

石野卓球（電気GROOVE）

山田さんとの初めてのコンタクトは、現在も僕がやっているラジオ番組に「まんが俺節」コーナーがあり、そのコーナーあてに山田さん本人から単行本「嘆きの天使」が送られてきた事でした。ヤングマガジンの「神の悪フザケ」以来、山田さんの作品には興味をもっておりその時すでに「嘆きの天使」は持っていたのですが、同封の手紙には「山田花子という者です、漫画家をやっております。もし良かったらコーナーでこの単行本を紹介して下さい。」といった内容が書かれておりました。その後僕達（電気GROOVE）がレギュラーで出演していたテレビ神奈川の番組「ファンキートマト'91」の中で根本敬さんや友沢ミミヨさんと我々電気GROOVEでやっていた、まんがのコーナー(お笑いまんが道場のガロ版?・)で何度かゲスト出演していただき、その番組を通じて初めて本人とお会いしました。本番前に楽屋で、根本さんだったか友沢さんかに「山田花子さんです。」と紹介され、伏目がちにあいさつを交したのを憶えています。当時は「嫌われてるのかなあ。」と思いましたが、何回か会ううちにそうでなかった事が分りホッとしたのも憶えています。一度、本番終了後に、僕のところに山田さんが、かけ寄ってきて、「卓球さん、これあげます。」と言って小さな封筒を差し出して、僕に渡すと、逃げるように去って行き、封筒の中を見ると、「いなかっぺ大将」のシールが数枚入っていた事がありました。

あまりのおどろきに、断片的な思い出を語ることしか出来なく申し訳ありません。山田さんの身の上にどんな事があったのか、今、現在、僕には分りませんが、自分の知り合い、しかも興味が持てる作品を生み出していた人が亡なるなんて、陳腐な表現ですが、悲しすぎます。

安彦麻理絵

山田さんがいなくなってしまった。私にとっては死んだというよりも、いなくなってしまったとゆう感じの方が強い。

以前、ヤングチャンピオン誌上で山田さんと対談するとゆう企画があって、それで初めて山田さんとお会いしたのだが、その時、秋田書店のカメラマンの方に撮って頂いた、山田さんと一緒に写ってる写真を私は今でも持っている。でも、死んだと聞かされてからは、私はその写真を、なんだかどうしても見ることができなくて机の引き出しにしまったまんまだ。

それは、秋田書店の会議室の中で撮ったものだったのだけれど、その時の山田さんはとても陽気で、そこらへんのモデルさんにも作れないよーな、ヘンテコリンなポーズを次々と自らあみだしてゆくので、私は「スゴイ人だなぁー」とただ、ただ恐縮してたのを覚えている。でもそんな私をみかねてか、山田さんは「安彦さんはダマッテルだけでもいいのよ。」と、私の頭を「さらさら」とゆーカンジで、なでてくれたので私は「お姉さんみたいな人だなぁ」と思った。

映画『無能の人』（竹中直人監督・㈱松竹富士配給）

『無能の人』打ち上げパーティで
上：武内享さん、蛭子能収先生と
下：竹中直人監督、風吹ジュンさんたちと

その後、秋田書店のとなりにあるホテルエドモンドのレストランで編集さんをまじえて、食事などしたのだが、何を話したのかは余り覚えてないのだけれど、別れぎわに山田さんから「お友達になって下さい。」といわれたのは、今でも忘れられない。

武内享（チェッカーズ）
彼女について想うこと

人がアーチストとして作品を作る時、そこには必ず自分の生き方が反映される。つまりそれは、自分の内面にあるモノをさらけ出す事であり、喜びや、苦悩、嫌悪感、悲しみといった数々の精神がストレートに表現されたり、又、エネルギーとなって作品を生み出すのである。それがたとえ、まったくのフィクションで人々に夢を与えるようなモノであっても、自分の体験をふくらませたノンフィクション的なモノであっても、まったくもって非現実的な世界であったとしても、そこには何らかの作者の心が見えてしまうものである。つまり、そうやって自問自答しながら、結局は作品の中で自分を見せてしまうのがアーチストの性ではないだろうか。

山田花子さんの作品の根底に流れるコンセプト、「社会に対する非順応性や疎外感」というものは誰でも確実に体験する事で、たぶんその度合は人それぞれ違うにしても、みんな一生付きまとわれるモノである。

私とて例外ではなく、こういう仕事柄、なんか他人と付き合う事がうまそうに見えるかもしれないが、実は彼女の作品を読んであまりにも自分とぴったりあてはまる事が多くドキッとする訳で、そういう意味では「自分と同じような人がいるんだ」といった希望や、どこか安心感を私に与えてくれるさくひんであった。で、彼女が作品をつくっていく中でどれくらい自分の中にある「苦悩」を増幅させて、（あるいはそのままの形で）書いていたのかは今となっては私には解らないけれど、それを書く事により少しでも自分自身が楽になれば、そして、それを読んで共感しているたくさんの人々、すなわち仲間がいる事がもう少しちゃんと伝わっていればよかったんじゃないかなと思い、1ファンとしてとても残念でしかたがない。

「よくチェッカーズのラジオきいてたんですよ。」とニコニコ笑って話していた彼女は、かわいくて本当にフツーの女の子だった。

心から御冥福をお祈りいたします

竹中直人 コメント

彼女とは〝無能の人〟の撮影現場で根本君に紹介されて初めてお会いしました。独特の雰囲気を感じる人で、絵にハマルいいキャラクターを持ってるなと思いました。本当にもったいないです。なぜまた自殺なんて……。まだまだやらなければならない事があったろうに……。とにかく生きていて欲しかったです。心より御冥福をお祈りします。

とうじ魔とうじ（特殊音楽家）

『ガロ』は大好きな雑誌なので、僕はいつも何かしら書きたいなとは思っているけど、久々に書く原稿が、まさかこんな特集になるとは………いやはや。

彼女は昔（5年以上前）からよく僕の公演を見に来てくれていて、会場で山田花子の姿を見かけたという噂はよく耳にしていた。でも僕は、当時まだ彼女の顔を知らなくて、話をしたことはなかった。それが今から一年半程前のあるライブで突然名乗りを上げて、挨拶に来てくれた。嬉しかったなあ。だから直接お付き合いさせて頂いたのは、それ以降だ。

ところで今僕は、ものすごい偶然を発見してしまった。『嘆きの天使』を読み返してみたら、著者プロフィールに1967年6月10日生まれとある。今日（この原稿を書いている日）は6月10日、なんと山田花子の誕生日ではないか。

彼女が名乗りを上げてくれてから、もう既に何度も会って、すっかり親しくなった（少なくとも僕の方はそう思っていた）ある日、彼女はあらたまった態度で僕にこう言った。「あのー、もしよろしければ、お友達になって頂けませんか？」何を今さら、じゃあ今までは何だったんだよ！「私、人間嫌いなんです。でも、とうじ魔さんとなら話せそうだから……」とも付け加えた。光栄ではある。光栄ではあるが、あらためて言うなんて変な奴だなあ。ともかく、この日僕らは正式に《山田とうじ魔友好条約》を締結したのだ。

それまで僕は彼女のことを「山田さん」とか「山田花子さん」とか呼んでいたのだが、正式にお友達条約を結んだからには、もっと馴れ馴れしく「花ちゃん」とか「花子ちゃん」とか呼んだ方がいいかな、と思い「じゃあこれからは何と呼びましょうか？」と尋ねた。そしたら「山田先生と呼んで」と命令されてしまった。

山田先生に最後に会ったのは、友沢ミミヨさんや福間ミサさんがやってるリスというバンドのライブの時だった。前に友沢さんがリスのライブに誘ってくれた時に山田先生も一緒にいて「とうじ魔さんが行くなら、私も行く。」という可愛げのあるお言葉をのたもうた。そして我々は示し合わせて、吉祥寺のマンダラⅡへとやって来たのだ。会場には、他にも大勢知り合いがいて、ライブ終了後僕がそれらの人達と話し込んでいるうちに、山田先生は黙って一人で帰ってしまった。でも僕は別に何とも思わなかった。だっていつものことだから。何の挨拶もなくプイと消えてしまう彼女の奇行に、僕はもう何回も遭遇して慣れっこになっていた。でもそれが最後になってしまうなんて。

5月26日、この日僕は下北沢に友達の芝居を見に行く予定だった。そこへ突然山田花子の訃報。狼狽した僕は何が何だかわからなくなり、何も手に付かない状態になった。何をしたらいいのかわからないから仕方がない、予定どおり行動するしかない。下北沢へ行くと田北鑑生夫妻にばったり会った（田北さんは下北沢でブックスおりーぶという書店を経営していて、とり・みきさんの漫画でも有名）。田北さんに山田花子の訃報を告げると、一緒にその死を惜しんでくれた。劇場では現代詩手帖の担当編集者、田野辺さんに会った。芝居が終わった後、田野辺さんと飲みに行った。僕はまた山田花子の話をした。田野辺さんも大きな才能の損失を嘆いてくれた。

この日僕は、やはり下北沢に来て良かったと思った。なぜなら友人に話すことによってだいぶ発散できたから。もし今晩誰にも会わなかったら、僕はもっとやりきれない気持ちだったろう。持つべきものは友達、ということか。そう思うと山田花子とも、もっと早く友達になりたかったな。彼女がもっと早く名乗りを上げてくれれば、もっと沢山話せたのに………でも、引っ込み思案な所が彼女の良さだから仕方がない、良しとするか。合掌。

知久寿焼（たま）

山田花子さんは、ひと足先にこの世の地獄からぴょおんと飛んで逃げてっちゃいました。たしかに、飛び降り自殺の似合いそうな線の細い美しいはかなげな容姿の人でした。彼女の漫画を読んでると、まるで自分の事が描かれてるような気がして冷や汗をかく事がたびたびです。二百年後には今生きてる人なんてもう誰も居ないもん、と強がって出かけたお通夜では、突然ことわりもなしに涙の馬鹿野郎がでしゃばって来て困ってしまいました。天国がほんとうにありますように。

知久さんと（さくらももこさん宅にて）

大宮イチ（レコード歌手）

「山田花子さんが死んだので」

山田花子さんにとって、どちらにいるのがいいかなど、アタシにはわからない。悲しむべきことなのか、お祝いなのかもわからない。イワナはよっぽど綺麗な水にしか棲まないという。そんなことを想い出した。

初めてお会いしたのは根本氏の個展の時だった。智恵子に初めて会った光太郎のような気がした。二人は同じ心で、けれど光太郎は智恵子が羨ましい。綺麗な綺麗な、愛敬が、智恵子にはあるからであります。他の誰もが気付かないことを、二人だけが気付いて目を見合って、ニヤ

第1弾 健康『愛と死』〜LOVE & DEATH〜

〔東京公演〕●場所／スペースゼロ（全席指定）(03-3375-8741) ●日時2月15日(金)19：30／16日(土)14：30・19：00／17日(日)14：30・19：00 当日券の発行・開演の1時間前 開場・開演の30分前 ●料金／前売¥2,800・当日¥3,000
●作／天久聖一＋中川いさみ＋山田花子＋ケラリーノ・サンドロヴィッチ＋健康 ●構成・演出／ケラリーノ・サンドロヴィッチ ●出演／まつおあきら・手塚とおる・犬山犬子・みのすけ・大堀浩一・藤田秀世・三宅弘城・峯村リエ・ケラ ●チラシ撮影協力・秋山奈津子 ●前売開始／1月6日(日) ●前売取扱い／チケットぴあ(03-5237-9988)・チケットセゾン(03-5990-9999) ●お問合せ／健康(03-3466-4430)

10劇団が、全国10都市で、年間250公演
TOUR DE MODERN THEATER '91

ッとするような感じで、お話しをした。お話しをしたのはそれが最後だった。

その後山田花子さんは、数少いアタシの東京での舞台を、みにきてくれた。その時は、会えなかった。

山田花子さんは、今年のお正月、年賀状をくれた。アタシはまだ返事を書いていない。

正直な、綺麗な綺麗な気持を持つ表現者にとって日本国は砂漠であります。子供のような、宇宙天然に逆らわぬ、精神の純度が高ければ高い程、砂漠の渇きは深まってゆきます。そして、そのための教育国であります。日本国は資本主義の世間体、ジャーナリズム。これからも、アタシは日本砂漠に潜み、表現というテロルを続けてゆく所存であります。戦友を失った気がする。

音の無い世界の中で自分の呼吸の中に潜む金属音だけが、際限なく繰り返される。

熱に浮いた、気の遠さで、
鍾乳洞の奥に眠る深い深い蒼い蒼い
小さな池の底無しへ向って
血を水に落とした時の
血のスピイドで
アタシのこころが
沈んでゆく

KERA ケラ

（劇団〝健康〟LONG VACATION）

天久聖一、中川いさみ両氏に加え、山田花子さんに私が主催する集団〝健康〟の公演「愛と死」の脚本を依頼したのは二年前の冬のことだ。

その日、山田さんは居心地悪そうに我々の稽古場の片端にポツリと座り、彼女の原案である〝ケンヂとルリ子〟のコントをじっと見つめていた。僕はなんだか申し分けない気分になって

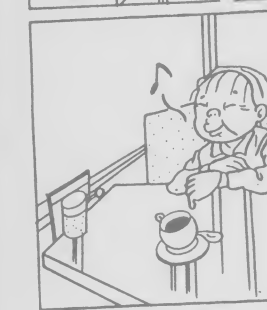
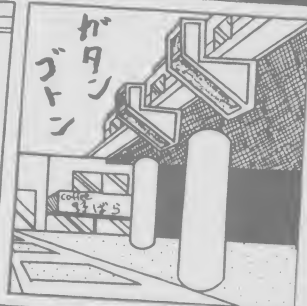
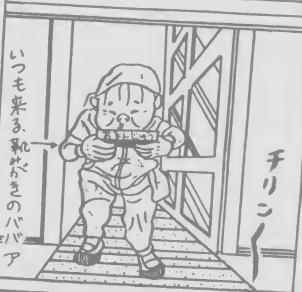
「あの、こーゆーところってやっぱり居づらいですか？」

と聞いた。すると彼女もまた申し分けなさそうに

「いえ、そんな、すみません」

などと言うものだから、私はそんなこと聞くんじゃなかったとより一層申し分けない気分になって黙ってしまったから彼女も黙ってしまった。

帰り際に、やはり彼女は申し分けなさそうに一本のカセットテープと魚のスタンプが押してある名刺をくれたので、私も申し分けなさそうに受け取った。カセットテープにはパスカル・コムラードのアルバムが録音されていて、それ以来僕はトイ・ピアノの音を聞く度に魚のスタンプと、あの日の申し分けなさそうな彼女の姿を思い出してしまうのだ。

山田さん、僕も、もちろんあなたも、申し分けないことなんかなにもしていなかったのに、どうしてあんなに申し分けない気分になってしまったんでしょうね。なんて、本当はそうした心境は寸分わかっているつもりです。お互い、その申し分けなさを、居心地の悪さを武器にしてきたんですからね。また申し分けなく思いながら何か一緒に出来ると思っていたのに残念です。とても残念です。どうか安らかにお眠り下さい。

『月光文化』3号より

南原四郎（〃月光文化〃編集長）

年がバレるが、私には今のまんががよくわからない。たとえば、吉田戦車。意味が分からないとか、そういうことよりも笑わせたいのか、そうでないのかがはっきりしない。信用金庫のCMでアニメになったのを見て初めて、あー、こういうことをやりたかったのか、とちょっと納得した次第。その点、山田花子のまんがは、読者に何を要求しているのか、よくわかった。それも身につまされるように、ヒシヒシとよくわかる。彼女のまんがの舞台である小学校というものが私の記憶にある三十年来、というより戦後一貫してあまり変わっていないようで、そのせいもあるかもしれない。

そんなこんなで『月光文化』で彼女に書いてもらうことにした。その二作目（三号に掲載）がガード下の喫茶店の話で、「野ばら」という喫茶店に毎日のように靴みがきのお婆さんがパチンコの景品をおみやげにもって現われるが、ウェイター達は迷惑がっている。しかしお婆さんはそのことに気づいていない（多分）という話である。

その原稿を受け取ったとき、彼女の作品の独特なエンディングについて質問した。「考えてやってんですか?」と。これは言い方が悪かった。彼女はむっとして「もちろん、考えに考え抜いてやってます」と答えた。私が言いたかったことは、作者として言いたいことを、一旦全部書いてから、その言いたい部分をバッサリ切っているのではないか、と思ったのだ。（「舌足らずな言い方」どころじゃない。これではむっとされるのも無理はない）

翌日彼女から電話があって、最後のコマの文字を全部削ってくれと言ってきた。私の推測はあたらずともいえども遠くはなかったのだ。その文字とは「全然わかってない」という文字であった。

「わかってない」ことを「わからせる」ことを放棄したそのコマの余白は喫茶店で一人コーヒーをすするお婆さんの横で白く輝いていた。

加藤良一（〃楽しい音楽〃代表）

高市由美さんに会ったのは今から五年くらい前でした。まだ山田花子さんにはなっていませんでした。高市由美さんが山田花子さんだったというのを知ったのも実はごく最近のことでした。それで山田さんがまだ高市さんだったその当時、彼女は私が作っている音楽グループ「楽しい音楽」のかず少ない応援者の一人で、私達の作ったレコードやテープを聴いた感想を丁寧なお便りで送っていただいたりしていました。それが縁でたった一度だけ彼女は私の事務所に妹さんを連れて遊びに来てくれました。でもそれが今思うと高市由美さんこと山田花子さんとの最初で最後の顔を見てお話しすることができる機会でした。その時の彼女の印象は明るくて暗いとっても感受性豊かな女の子だなと受けました。何かモノを造ることが好きな人だなとも思いました。高市さんはうつむいて早口でしゃべってい

ました。学校にもどこにも仲良しの友達がいなくて妹さんだけが自分にとってのかけがえのない親友であること。新宿のライブハウスでヘビメタの人たちとおかど違いのジョイントライブをしたこと。好きな音楽のこと。アメリーモランの唄がとっても可愛いということ。アメリーモランのテープはその時もらって今でも聴いています。他にも色々とりとめもない話をしてから帰り道に三人で一緒に豆腐ゴハンを食べてから別れました。井ノ頭線渋谷駅の階段を姉妹なかよく走って行く後ろ姿は今でも覚えています。その後ろ姿が高市由美さんこと山田花子さんを見た最後の後ろ姿でした。それからしばらくして郵便で高市さんからカセットテープが送られてきました。それは私が是非、聴かせて下さいと言っていた高市さんの唄のテープでした。そのテープの中で彼女はオルガンを弾きながら動謡を唄っていました。とっても無邪気な唄でした。つい最近そのテープがひょっこり出て来ました。久しぶりに聴くその唄声は懐しくもありまた淋しいものでもありました。そして五年ぶりに出て来た高市さんのテープを聴いた半月後山田花子さんの死を知りました。正直な気持ち彼女の死は現実のことと思えず別の世界での出来事のように思えてなりません。それは私の心の中では、高市由美さんと山田花子さんがイコールで結ばれていないせいかもしれません。しかし真実として私の知っているハニカミ屋で「楽しい音楽」が好きですと言ってくれた高市由美さんは山田花子さんという有名な漫画家といっしょに次の世界に旅立ってしまったのです。山田花子さんそして高市由美さんが死ぬ少し前、「楽しい音楽」の新しいレコードが出来上がりました。聴いてもらえなくてとても残念です。もっと早く出来上がっていたらと思っています。

サヨウナラ高市由美さん。そして山田花子さん。

原マスミ

まだむかし、山田さんが高校生だった頃に彼女からよくファンレターをもらいました。その中で彼女は、将来マンガ家になりたいと云ってました。いつも短編のコピーが同封されてありました。そして何年かしてほんとにマンガ家になってしまいました。強い人だなと思いました。

何度か彼女と話す機会がありました。彼女はいつもにこにこしています。でも何か二三個ふくみのあるような、見たことのない変った微笑でした。非常に口数は少ないのですが、ぎゅうっとテレパスを押し出すような感じの寡黙です。中心に固く強い軸をもっていてそこからこちらにジワリと伝心を送ってくるような浸透圧のある寡黙です。そしてとてもとても可愛らしい人でした。

彼女が死を選んだ理由を知りませんが、その理由がどんなものであったとしてもきっと、「強い人」という印象は、やはり変らないような気が何だかするのです。

どうぞ、ゆっくりと休んで下さい。

石川浩司（たま）
お元気で。

山田花子さんに初めて会ったのは、確か今から四年程前の事でした。友人の雑誌編集者S君が、当時アマチュアだった僕の「たま」のライブに、彼女を連れてきたのでした。

「『ヤングマガジン』に『神の悪フザケ』を連載している山田花子さんです。」メジャー誌での漫画家ということだけで、「スゴイ。そんな有名な人がライブを見に来てくれるなんて。」と単純に思ったりしました。マンガから想像されるよりも美人だな、という印象がありました。

その後、マンガの中に「ねーえ来週たま（ってゆうバンド）のライブあるよっ、行こうねー」というセリフが出てきてニヤリとしたり、ついには当時僕が発行していたせいぜい部数50部のミニコミに、作品を送っていただいたりして、「おおっ、プロの人が、ロハで!」と単純に喜んだりしました。

そうこうしてるうちに「たま」の方がちょっと忙しくなってしまったりして、顔見知りと友人の間の「中途半端な知り合い」のまま、時間が過ぎてゆきました。何かの折にひょいと顔を合わすと、お互い、一瞬、虚を突かれたお見合い状態になってしまって、「あっ、あっ、あっ、ドウモ。」と首をヒョコンとしてシドロモドロになってしまったりしました。

僕は実は、基本的には人と接するのが苦手で、いや苦手というより考えてしまうので、それが面倒臭い自分の性（サガ）なのです。この人と、争いにならない様、どうゆう話し方で、何を話したら一番相手とのコミュニケーションがスムーズにいくか。とにかく険悪な雰囲気の場所に自分が居ることが、何よりも泣きたくなってしまう程、嫌なのです。だから、そうならない様、そこから逃げる為のコミュニケーションという物が、僕にとってとりあえず、現実のあらゆる場面において一番大事なわけです。そうゆう事で、常にコウモリ会話をして生きてきたのです。が、時々、それを見透かされる人がいると、ドキッとして何も話せなくなってしまうのです。

山田花子さんの場合もそうゆう人で、多分、本人は見透かそうなどという意志はなくても、ミエチャッテルのがこっちにもワカッチャウので、お互い会話の間合いがうまくとれなくて、妙にオロオロしてしまうのでしょう。でも本当はそういう風にミエチャウものだからかえって人とのつき合いが不器用な人、社会との間がどうしてもズレちゃう人。そんな人が僕にはどう仕様もなく、愛おしいのです。自分と似ているのです。

だから、山田花子さんも、新しい暮しを始めている事と思いますが、どうか、そのままで。そのままがいいと思います。

お元気で。——

手塚能理子（本誌編集者）

私が青林堂を一度退社してしばらくたった頃、その時住んでいた高円寺の部屋に、妹の高市真紀と一緒に遊びに来てくれた事がある。その時以前、私が週刊宝石のマンガ書評欄で、彼女の単行本「神の悪フザケ」を稚拙な文章でもって紹介したのを覚えていてくれて、「あ、あの時はありがとうございました。あの凄く、嬉しかった、です……」と呟くように言ってくれた。彼女の声を聴いたのはこの時が初めてだった。溶けてしまうのではないかと思うくらい、か細い声だった。

あれから、いろんな場所でいろんな場面の山田花子と遭遇した。しかし、彼女はいつも決って、伝えたい事を一気に早口でしゃべり、それに私が答えると「ニッ」とほほ笑む。そして満足そうにその場を立ち去ると、また口数の少ない元の表情に戻ってしまうのだった。

でも、私はその「ニッ」がとてもかあいらしくて好きだった。ずっとしゃべるチャンスを待ち、サッと駆け寄って話しかけてくる、伝えたい事が思うように伝わると、一瞬だがそうして全身に喜びを表す、その態度が一生懸命で健気なのだ。たった二、三分の事なのだが、口数の少ない彼女にしてみれば、大変なエネルギーを要する事だったと思う。

健気といえば、山田花子は自意識に対しても、非常に健気であったと思う。それは漫画にもストレートに表れていた。その結果、彼女の漫画から飛び出す、ひねりの無い強烈なパンチは、読者よりも何よりも、実は彼女自身にストレートに向かって行ってしまったのかもしれない。

去年の11月に、私は山田花子に、「毎回4頁だけれど、もっといろんなものを付けたして、8頁くらいで描いてみない？」と話を持ちかけた事がある。もっと距離をおいて、もっと貪欲に描いて欲しかったからだ。けれども彼女はしばらく考えてから、

「自分もそうしたいんだけれど、どうしても描けないんです。でも頑張りますから……」

と、健気に呟くのだった。

一番好きな漫画の世界に身を置きながらもこんな形で逝ってしまった山田花子を想うとやり切れない気持ちになる。勝手な言い分ではあるが、さらに歳を重ねれば、健気さだけでなく、貪欲さだって身に着けられたかもしれない。貪欲は時には過去を違った形で見せてくれる。自分の無駄だと思っていた部分に面白い色を付けてくれる。

しかし、そんな技も身に付ける事無く、ただひたすら健気に生きた山田花子は、それこそ〝神の悪フザケ〟のようなこの世の中で、〝嘆きの天使〟として生きる人々の中のひとりであったのかもしれない。

初めて会った時、山田花子は、真紀の後に隠れるようにして、ペコリ、と頭を下げた。彼女がガロに登場してから2年の頃だった。私はその時、年下の友達がまたひとり増えた、とひねくれ者にしては健気にもそう思ったのを、覚えている。

湯村輝彦

「ガロ」編集部から、山田花子の『嘆きの天使』の装丁をやってもらえないか??と依頼があった。二年前の、丁度今頃のことである。嬉しかった。即OK!! した。

私は、いわゆるガロ的な漫画というものを、絵が面白い＝（イコール）好きな漫画という勝手な視点から楽しんでいたので、山田花子は、断然好きな漫画家の一人であったのだ。

打ち合わせの日、午後三時おヤツの時間（私はこの時間帯に打ち合わせをセットすることが多い）に、谷田部記者に連れられて、おさげ髪の山田花子が赤いベレー帽で現れた。

甘い最中と渋い日本茶…ポツリ、ポツリ喋る山田花子を中心に、ゆっくりと時間が流れていく中で、私は、山田花子自身の写真を使って装丁したいと思い始めていた。

撮影の日も、山田花子は赤いベレー帽でやって来た。この日、私は急な用事で途中から現場を離れなくてはならず、最後まで撮影に立ち合うことが出来なかったが、後日、送られてきた山田花子の写真からは、私の思っていた通り、どこか遠い昔の日に嗅いだことのあるような、懐かしい香りがするのだった。

あの日以来、今回の悲しい知らせを受けるまで、私は山田花子に会うことはなかった。そして、現在、ロケ現場となった古い仕事場は取り壊され、新しい建物に変ってしまったが、私のノートの一頁には、まぎれもなくあの時の山田花子が、少しはにかみながら微笑んでいるのである。

冥福をお祈りする。

湯村輝彦さんの手帳